

## 熊野勸心十界曼荼羅、比丘尼の絵解について 令和四年九月三十日 於加茂法話会

絵は「心」字を中心に、仏、菩薩をはじめとする十の世界との結びつきが描かれている。上には、「老いの坂・苦難に耐えながら年をとってゆくのを、坂道を上るのにたとえた語」

【村上・光浄寺蔵】

右に入口と左に出口…生まれて・成長・結婚・子供が生まれ・老いて行く・死・墓。春夏秋冬が説かれている。画題の中心に視点を据えれば現世での悪業、来世での苦患は孟蘭盆(うらぼん)の施食(せじき)供養(くよう)に全てが救済されると説く。画中のほとんどを占めるのは生々しい地獄の描写で、地獄といった女性に關係する地獄が描かれる。なぜか。「絵解き」と呼ばれる解説を行ったのは、熊野比丘尼(くまのびくに)と呼ばれる女性の出家者で、その主な対象は女性であったからである。

### 人間界と四聖

この図には私たちの住む「人道」を含む十の世界が描かれることから「十界曼荼羅」と呼ばれています。

この「十界」は、悟りを開き、煩惱のない四聖(声聞、縁覚、菩薩、仏)と、

苦しみに満ちた六道(天、人、修羅、畜生、餓鬼、地獄)から構成されています。

画面は霞によって上下に大きく二つに分けられています。まずは画面の上半分を見ていきましょう。

赤と白で彩色された日輪と月輪のもと、大きな山が画面を占めています。山の手前側、頂のすぐ下には阿弥陀如来と諸菩薩によって「仏界」と「菩薩界」が、山の右端には「声聞界」、左端には「縁覚界」の「四聖」が描かれます。さらに菩薩界と縁覚界の間には六道のうちの「天道」が、さらに山の向こう側には、人の一生をもとにした「人道」が表わされています。この区画には、四聖の世界と、六道の中でも上位にあたる天、人道が配されています。

「人道」の部分を少し詳しく見ていきます。山の右端のふもとの建物を見て下さい。屏風を背に椅子に深く腰掛けた女性と縁に坐す男性、そして桶の中で産湯をつかう赤ん坊と産婆の姿が見え、ここには出産のシーンが描かれています。その左上には紅い衣をまとってハイハイする乳児。この赤ちゃんは鳥居をくぐり、やがて少年から青年へと成長し、山の斜面を登っていきます。人生を歩むことを、山を登ることにとえていっているわけです。

山の頂の少し前、扇を持ち振り返る女性とそれに応える男性。これはこの男性が結婚したことを表わします。ここで人生の折り返し。夫婦は坂を下りながら、やがて杖をつくなど老いていきます。ついに山のふもとに到達。生まれた時と同じように鳥居をくぐり、この男は死を迎えたわけです。我々は人として生を受けたからには、必ず死を迎えなければなりません。そうした人の身の苦しみの一つ、「生老病死」を象徴的に描いています。

さらにご注目いただきたいのが点景として添えられた樹木。幼少期には梅、青年期には桜、壮年期には松、頂を越えたところには紅く色づいた楓、老年期には冬枯れし、雪の積もる樹木が配されます。人の一生を四季の樹木によって表わしているわけです。山を下り、一生を終えた男。この後、男はどこへゆくのでしょうか？我々は霞

に隔てられた画面下部

の世界へと導かれています。

正壽寺 吳定明合掌

